

駢と訓練

待つわ

「わたし待つわ いつまでも待つわ たとえあなたが振り向いてくれなくても……」
といった歌詞の歌が一頃流行っていたけれど、二階の窓から外を眺め、まだ帰ってこない家族を、首を傾げ、時々足音を確かめるためか耳を微妙に動かしながら、待っているノイの胸の中では、今もこの歌が流れているのだろうか。窓際の椅子にちょっと膝を崩した独特のラブ座りをして、窓枠に顎を載せたその後ろ姿は、竹久夢二描くところの恋人を待つ女性の姿に似た可憐さと色気さえ感じさせる。

「ノイ、大丈夫だよ。間もなく帰って来るからさ、こっちへおいでよ。」

尻尾ばたん。ノイのお返事は尻尾である。顎を窓枠から上げ潤んだ目で振り返るが……

「だって、まだ足音聞こえないよ。もうちょっとここで待ってる……」

再び窓枠に顎を載せたノイの瞳には、すっかり枝を覆った辛夷の若葉が映る。塀の上を横切るお向かいの家の猫が映る。しかし、ノイは、いっさい関心を示さない。

考えてみると、ノイの生活には、「待つ」ことが大きな割合を占めていることに気付く。

朝、目が覚める。カーテンの隙間からは、もう明るい陽光が何時もの場所まで差し込んでい

る。なのに・・・寝坊なふたりはまだ起きない。ノイは自分のベットに身を起こし、伸びをして、ふたりの寝顔をそっと覗く。

「あー 動いた。・・・ね、起きよう、起きよう。」

「今日はお休みなの。もうちょっと眠るのよ。ノイも、もう少し寝てらっしゃい。」

「ちえ・・・駄目か。そろそろトイレにも行きたいし、お腹もすいたのにな・・・仕方ないからひっ付いて寝ちゃおう。」

ノイは、我々のベットに移動してきて私の足を抱え込み、うとうとしながら長期戦の構えで待ちに入る。休日の朝の、わが家のパターンである。枕がわりにされた足は少し重いけど、「重たいよ。」と言えば退いてくれるし、こちらが起きだすまで、静かに待っていてくれるから、今ではのうのうと朝寝が楽しめるが、ノイが家に来たばかりの頃は、とてもこうは行かなかった。起きだして動き回るから、必然的にお腹は朝御飯を要求するし、尿意は催してくる。汚れたトイレを始末してやらないと絨毯の上にジャー。これではおちおち休日の朝寝を楽しんではいられない。こちらが起きだすまで待っていてくれないと、寝坊すけ一家の生活は成り立たない。だからといって、ノイをわれわれの寝室から追い出して、「おんもの犬」にしておいたのでは、何時まで経っても一緒に朝寝を楽しめる子には成らなかつただろう。

「ちょっと待ってて。このジーパン試着して見るから。」

言われたノイは、試着室の前に正座して、カーテンの割れ目に首だけ突っ込んで待っている。

「あら！ 可愛い。」

居合わせた人たちは、その何ともユーモラスで漫画チックな後ろ姿に声を上げる。こんな光景はしよっちゅうだから、ノイとのお買い物は、こちらも楽しくなる。

「ノイノイ、待ってて。僕オトイレ行って来る。」

公園の公衆便所は決して綺麗な所ばかりではないから、ノイを連れては入れない。こちらの姿が見えない状況でも待てるということは、共に生活をする上でどうしても必要なことである。

他の国々の人たちと較べ、日本人は特にせっかちで、信号が変わっても前の車が発進しないと、他の国の何分の一かの秒数でクラクションを鳴らすという統計があるそうだけど、待たされるのが気にならない人も少ないだろう。団体旅行で集合時間に遅れて来る人を待たされたりすると、もう二度と団体さんには加わるもんかと苛々がつる。ラーメン屋やアイスクリーム屋に行列を作るのが流行ったりもするようだが、それにはどうも付いて行けない。当方、待つのは大の苦手である。犬は飼い主に似るといふけれど、わが家のふたりはせっかちな方だから、ノイも負けずにはせっかちである。性格的にはラブラドルらしい大らかさを持っている癖に、大好きな自動車に乗り込むときなど、開き切らないドアにゴツンゴツンしたりして、「誰も

見てなかったわよね。」と照れ臭そうに周りを見回したりしている、飼い主としては、苦笑いするしかないさそうである。

試着室の中の女房殿が何をしているのかわかれば、じっといつまでも待っていていられるし、清潔でない公衆便所は入ると靴を履いていない足が汚れるという、何であれ理由がはっきりしているということは、ノイにおいても待たされる苛々を解消するのに、充分有効に働いているようだ。

自分が待っていないければならない理由を、ノイがどこまで詳細に理解しているかはわからないけれど、わが家では、待たせる時には悉く訳を話して聞かせることにした。

「待っててね、今、お肉入れるから・・・ほうら、美味しくなったわよ。ノイの御飯。」

「待ってよ。今、お尻拭いてやるからね・・・。」

「ノイ、待って・・・あっちの小父さんノイのこと怖そうにしてるから通り過ぎるまで待ってよう。」

リードの有るなしに係わらず、ノイは「待って」に敏捷に反応する。

「今日はお仕事だからね。ワイシャツにネクタイ、背広なんだよ。ノイは良い子でお留守番しててね。なるべく早く早く帰るからね。」

何度も同じような状況下で、同じ説明を繰り返していると、ノイはその状況を見て、自分で

判断して行動するようになった。今では、日常生活の中で理由説明を要する件は殆どない。こちらがスーツに着替え始めると、ノイは、心持ち首うな垂れて窓辺の椅子に登り、見送りの体勢に入る。持つ物や着る物の違いが、言葉に代わる理由説明になっている。だから、ノイのアンテナは、何時もふたりの方向に付けられている。うとうと眠りを楽しんでいるような時でも、話が自分に関係しそうになると、耳がひくひく動きだす。そして、自分にとって都合の良い結論に達しようものなら、ばっちりお目目が見つめている。

「ありゃ！ ノイノイ聴いてたの？ そんなに神経使ってる長生きできないぞ。もっとのんびりしておいでよ。」

ノイは、一面から見ると、常にふたりの決定を待つて行動しているといえよう。結果的に、それが良いことか悪いことかは分からないけれど、自分勝手に行動しない子で居てくれることが、わが家においては、何より有り難い家族の条件である。

一旦、リードを離したら最後、なんとか再び繋がれまいと、呼べど叫べど逃げ回って、追っ掛けごっこになってしまうというわけで、二十坪もの紐リードでお散歩している活発な柴犬君や、飼い主をそこに残して振り向きもせず、一直線に何処かへ矢のごとく優雅に走り去ってゆくアフガン君、「よらば咬むぞ」とばかり肩怒らせ、擦れ違ふ犬や猫に唸り声を上げ、辺りを睥睨しながらリードを引っ張っている侍犬君などを見ていると、

「ふたりとも、ちゃんと付いて来てんのかな。うっかりするとすぐ何処かに消えちゃうんだから。よし、いるいる。」

と、牧羊犬ならぬ牧人犬みたいな顔をして、ふたりの周りを後になり先になりしながら、それでも自分の気になる匂いの跡はちゃんと追いつき、しっかりと自分の匂い付けも済ませているノイには、われわれふたりの方が、平和な散歩を楽しませて貰っていることを感謝している。

騾ってなあに

世の中、相変わらずハウツウ物が大流行のようで、これに頼れば手軽に一通りのノウハウは身に付けられる風潮のせいか、家族として迎え入れたワンちゃんの騾についても、そういうものを欲しがる人が多い。かくて、世の中、犬の騾に関する文献が満ち溢れている。かくいう私もかつてはご同様に、いろんな本を買い、読み漁った。これらの執筆者諸氏は、訓練士さん、獣医さん、或いは職業的なブリーダーとまちまちで、おっしゃっていることも、また、まちまち。それもそのはずで、犬の専門家ではあっても、それぞれの著者が、総ての犬種を子供の時から実際に育てた経験が有るといってわけではなく、部分的な点を除けばどうしても話がありきたり、一般的なことばかりということになる。いろいろ読み漁った結果、これらの本が教えてくれたのは、所詮、犬の騾も人間の騾も何ら変わるところはないということだった。

よく、「犬には何を躰ればいいんでしょうか？」とおっしゃる方がいるけれど、決まった躰のバターンなんてものはないと思う。「待て」はできないと困るけれど、「お手」や「ちんちん」はできなくなってしまうと思うお家もあるだろうし、五時には起き出しておじいちゃんのお散歩に付き合っただけで欲しい家庭もあれば、九時頃までは静かに寝ていて欲しい家庭もあるはずで、玄関に人が来たら吠えて知らせて欲しい家もあれば、やたら吠えては困る家もある。家中で一緒に暮らそうと思っているお家では何よりオトイレの躰が大事だけれど、お庭にだけいる子の場合には、泥足で人に飛び付かないことの方がずっと大事になる。喜んで顔中嘗め回す子が好きな人もいれば、お澄まし屋さんが好きな人もいる。家族旅行と一緒に連れて行く気なら、日頃からそれなりの躰も必要だ。

何から何まで申し分ない人物なんて結婚式のお仲人の言葉の中にしか居ないように、犬にだって居ないのだ。競技会や展覧会の場でのことならいざ知らず、家庭の犬という点から見れば、これこれこれだけ教えておけばという、枠もなければ決まりもない。ただ、ラブラドールである以上、明るく、素直で優しく、潑刺としていなければならぬ。これが失われては、いくらお行儀が良くても、もはやラブラドールではない。

辞書によれば「躰とは、礼儀作法を覚え込ませる、身に付けさせること」とある。しかし、犬は、生まれながらにして犬の社会における礼儀作法を体得しているのが普通である。自分の

領分を犯すもの、何者なりともいきなりがぶりの闘犬みたいな犬も居なくはないけれど、日頃、可愛がられている子の場合には、よらば咬むぞの侍犬君も、相手が仔犬だと知れば、

「うるせえな、ちえっ、しょうがねえなあもう、あっち行けウー ワン」

と声で威すことはあっても、咬みつくなどの武力行使に出ることはしないのが普通である。女の子に対する男の子の様子など見ていても、最初は、

「宜しいでしょうか。お綺麗ですね・・・。」

とでもいう顔付きで近寄っていくが、おしりのほうに余り鼻先を近付けてクンクンやり過ぎたり、不作法に彼女のお尻にびよんなんてしてきて、

「しっつこいわね！ ウワン！」

なんて軽く咬み付かれそうになっても、さすが逃げ出すだけである。男の子は、いかに自分につれなくあたる女の子に対してでも、暴力を奮うことはないのがラブラドルである。何処かの世界の出来事のように、プロポーズに応じてくれない恋人を殺傷したなんて野蛮な話は聞いたことがない。たまたに気の合わない男の子同士が争いを起こし、迂闊に手を出して割って入った人間が咬み付かれて怪我をしたなんて犬種もあるようだけれど、これは犬の社会に不用意に踏み込んだ人間の落ち度であろう。ノイ母さんは自分よりずっと大きくなってしまった子供たちに対して、余所の子にはついぞ見せたことのないような横柄さで、偉そうに叱り声を上

げるが、叱られた子供たちは、不服でもきゅんきゅん鼻声を上げはするものの、決して母親に刃向かうことはしない。

生来の基本的礼儀作法を身に付けているという点において、ラブラドルは特に際立っていると言えるようだ。しかし、これらは置かれた環境によって、どうにでも変化しうることも忘れてはならない。ラブラドルが、基本的に犬社会での礼儀作法を身に付けた犬である以上、ラブラドルに対する躰とは、礼儀作法を教えることではなくて、それぞれの家庭に合わせた暮らし方を教えることにほかならない。

どこの家庭にも、それぞれの家庭の流儀がある。だから、どれほど愛し合った恋人同志でも、結婚して相手の家に入ると、その家の微妙に違う流儀によって様々なトラブルが引き起こされる。世間によくある悲劇である。自分に都合の悪くなった犬はさっさと他人に遺つてしまふとか、保健所に始末を任せるとかが平気でできる人非人は別にして、普通は人も犬も困りながら長年付き合う羽目になる。幸い、犬の場合には、

「隣の何子ちゃんも、クラスのみーんなも・・・」

と、他と比較して要求を突き付けてくることはないけれど、

「諸般の事由により今日からわが家の流儀を変更します」

なんて話し合いは困難だから、家庭の流儀をどうするか、最初から確り決めて教えるのが何よ

り大切なこととなる。

途中からこちらの都合で、今まで許していたことを禁止するより、成長に応じて、禁止しておいた枠を緩めていく方が、

「そうか。こうすれば・・・、こうしなければ・・・、こういうことも可能なのか。」

と、ノイにも張り合いが出てくれることを願って、わが家では禁止や制限の範囲を、最初は厳しく、次第に緩くして行く方式をとった。一つ一つの物事に対する対応がある程度確立され、状況が変わっても身に付いた習慣が変化しなくなるのを見極めて、禁止や制限を一つずつ取り払っていく、この方法は、最初から全て自由な中で、してはいけないことを教えていくよりも容易だと思われる。

始めはサークルに入れておくが、出しても色々なものを持ち出したり咬んだりしなくなった。サークルの扉を開放し、トイレが大丈夫になったら、サークルやケージとさようなら。家の中を自由に歩き回らせ、食事の支度が始まると、自分もどうしても入りたがって、入口を塞いだ炬燵板に繰り返していた体当たりを止め、言葉で指示が効くようになって、台所も出入り自由。テーブルに手が出なくなると、どの椅子にも上がってOK。といった方式である。

当然、犬社会の礼儀作法と人間社会の礼儀作法は、部分において食い違いも大きいから、一朝一夕に理想の姿を望むのは無理と心得るべきである。人間の子供だって、何年もかけて教育

しても、理想通りになってくれる確率はさほど高くはない。

じぶんち流

新しい家族として迎えられたノイが、わが家流に慣れるまでには、相当のカルチャーショックが有ったことだろう。ふたりはなるべくノイを身近に置いて、できるだけ一緒にいる時間を持とうと考えていたので、それだけノイに要求される項目も増えることになった。列举してみよう、

- ① 決まった場所でトイレをすること。
- ② 決められた時間は自分の場所にいること。
- ③ 家の中は土足厳禁。
- ④ 勝手に二階から降りないこと。
- ⑤ 食卓には触れないこと。
- ⑥ 物を嘔つたり、持ち出さないこと。
- ⑦ 散歩のとき水をあまりに飛び込まないこと。
- ⑧ 拾い食いをしないこと。

どの項目も、家の中で一緒に暮らすようにするわが家では、どうしても守って貰わなければなら

ない必要な事項である。

わが家の場合、ノイに何かを教える時には“ラブラドールは頭の良い犬なのだ”という思い込みを、絶対の信条とした。

「相手は大なのだから理解できないだろう。教えても無駄だろう」

がないわけだから、ノイにしてみれば、大変迷惑なことも多々あったに違いない。しかし、幸いなことにノイは、

「とんだ家に貰われて来ちゃった。家出しよう。」

とは、思わなかったらしく、玄関や木戸が開いていても外に出て行こうとはしなかったし、何でもノイの鼻先に突き付けて、

「これ、〇〇って言うのよ。こうやって、こうすると、こうなるのよ。」

「黙って持って来ちゃ駄目！ ノイのじゃないでしょ。」

「ほーら、これ危ないのよ。ノイがお鼻突き出してくると、こんなに切れちゃうのよ。お鼻切れたら困るでしょ。」

と、包丁で茄子をばっさり切ってみせたりしていた女房殿を、ノイは、一番信頼し、慕っていた。

「ここでおしっこしちゃ駄目でしょ。ほら、臭い臭いでしょ……オトイレはこっちよ。」

「足拭かないうちに上っっちゃ駄目！ 見てご覧なさい。汚れちゃったでしょ。」

鼻先に持って行けない場合は、首筋を捕まえて鼻面をそこに持って行く。これは嫌がっても逃がさない。逃げ出した時には何が何でも捕まえて、確り叱って置かないと、叱られそうになると心配を察してすぐに逃げ出す子になってしまう。ただし、可愛がっているという自信があったこそ、思い切り叱れる。その子を愛していない飼い主に、叱る資格はない。それではひねくれ犬ができるだけだ。

ラブラドールは根っから素直であるせいか、

「お前は頭が良いのだー。」

という、われわれの思い込みの強さに感化されたのか、首を傾げもってもらいたい顔付きで聞いていたことは、こちらが考える以上に、容易に理解してくれたようだった。

これに味を占めて、ふたり・・・特に女房殿は、まだ仔犬であったノイに向かって、何でもかでも説明した。好奇心旺盛なノイは、こちらが何かしていると、すぐ顔を出すから、たちまち説明魔に捕まることになる。何だか知らないけれど、相手が自分に何か一生懸命語り掛けている時に、とことこ勝手に逃げ出すのは犬の社会の礼儀作法にも反することなのか、これは教えなかつたけれど、ノイは尻尾をゆるゆらさせながら顔を上向きにして聞いている。しかし、女房殿の説明は噛んで含めるように長いから、ノイは疲れて座り込む。この方が必然的に顔は

人間の目を見つめるのには楽ちんだ。その内、足も崩れてラブ座り。長期戦の構えとなる。

「わあ！ 説明終わった。」

ノイは急いで立ち上がり、ちぎればかりに尻尾を振って女房殿に突進。頭を擦り付けて「良い子ちゃん、良い子ちゃん」をして貰う。どうやら、これがノイに色々な理由を理解させること以上に、「待つこと」を教える効果があったのではないかと思っている。お尻をむすむすさせながらも、こちらが何か語り掛けている間は、「待つ」ことができるようになってから、ノイに、わが家の流儀を納得して貰うのは大変楽になった。しかし、そうになると、ノイは幼児と同じで、目新しいものには何にでも「それなあーに？」「それどうするの？」「なんでえ？」「私にも見せてえ。」と顔を出すから、わが家の日常を一通り理解し終えるまでの一時期は、説明会が大変であった。

「待つこと」は、人間の側からすると、どうしても犬の側の礼儀作法の中に加えて貰わなければ困る事項である。じぶんち流の躰を新しく迎えた家族に身に付けて貰う基本は、実にこの「待つこと」にあると思われる。

①決まった場所でトイレをすること。トレーの中に敷いた古新聞の上で用を足すことを覚えるのに、余り時間は懸からなかった。獣医さんの説によれば、

「絨毯やタオルの上だと、おしっこがすぐ染み透って足が濡れることもなく、気持ち良く用

が足せるから、そういう場所が好きなんですよ。」

とのことである。最初はうまくできた時にビスケットの一枚かけを与えるなど、食いしん坊の性質を利用したりもしたけれど、獣医さんのおっしゃるように、ラブラドルは根が清潔好きなようで、汚れた跡をすぐ掃除してやりさえすれば、ここにすれば片付けてくれるから、何時までも汚なくないと思うらしく、用意されたトレイの上の古新聞で用を足し、絨毯や敷いたタオルの上ではしなくなった。

清潔好きは大いに結構だったのだが、ノイの場合は清潔好きが少々極端過ぎて、お庭で日向ぼっこなどしている時に、大きい方をした後で、こちらがうっかりしていると、

「さっさと片付けてくれないんだから。もう、気になるな。自分で片付けちゃおう。」

とばかり、出した物をまた上から収納してしまうのには困らされた。そろそろ例の時間だと、こちらが注意していることで、この習癖も治まったけれど、後日、ノイが出産した時に、仔犬たちが母乳だけを飲んでいたら二週間ぐらいの間、今度は仔犬たちの排泄物を巡って争奪戦が再開した。

②決められた時間は自分の場所に居ること。これは、結局、「待つ」ことを覚えさせることであつた。わが家では最初の頃、居間に六面フェンスを組み立て、ノイの居住区とした。寝る時、留守番をさせる時、ふたりの目が届かない時は、そこに入って居て貰うのが一番安心だっ

たのだが、

「出せ。出せ、出してよ。不法監禁だあ。」

とばかり不満爆発、全身でフェンスに体当たり。我武者羅抗議活動はこちらの姿が目に入るあいだ中、根気よく続けられた。ふたりの姿が見えないときは散らかし作戦。日頃のノイを見ていると嘘のような話だが、これも「三つ兎の魂」か、未だにこの作戦は効果ありと確信している節がある。現在では、家中がノイの自由空間でサークルも何もないのだけれど、彼女にとつて不当な留守番、例えば散歩もまだ、夕食もまだ、お部屋に電気も灯けないで、お土産買ってくるとも言わないで出掛けてしまった、なんて時は、年に一度か二度のことだけれど、この抗議作戦を取ることがある。もつとも、彼女も物の価値観を大分わきまえてきたと見えて、部屋中に作弄的ならば撒かれているのは、屑籠の中のごみであり、クッションや枕の類が無事なのはいうまでもない。

③土足厳禁。勝手に外へ出なければ足も汚れないわけだから、これは、家への出入りを許可制にすることで解決した。人間大好きなラブラドルは、一人だけ庭に居るのは好きではない。世の中一般に、大きな犬を飼うのには、広い庭が必要だと勝手に決めている人が多いけれど、一頭だけで飼うのなら、ラブラドルは幾ら広い庭があつたって、一人で駆け回って遊んでなんかくれない。自分の領土の検分よろしくクンクンやりながら、一回りして来るだけなの

が落ちである。後はのんびり横になって目を細め日向ぼっこに専念する。そんな時、目と鼻の先に隣の家が見えるより、遙か彼方にまで続く芝生が見渡せる方が心地よいには違いないが、要はビタミン類を生成するために、日向ぼっこができるだけのスペースが在れば足りるのである。運動には、どうしても誰かが何処かへ、連れて行かなければならない。庭があれば散歩をさぼれるわけではない。

ノイもご多分に漏れず日向ぼっこが大好きだ。しかし、ノイは真つ黒で太陽光線の吸収率が良いためか、たちまちふたりのことを思い出すのか、すぐに家上がりたくなる。最初の頃、わが家では、日中はノイを外に居させることにしていたから、日射病にならないよう、出入口に当たる部屋の一角をフェンスで区切ってビニタイルを敷き、日影で涼めるようにして置いた。だが、ノイは多くの時間を、われわれの生活空間である二階の窓を見上げて過ごしていた。ある期間だけではあったけれど、家へ上げたり降ろしたりを頻繁にさせなかったことも、「待つ」姿勢を培うのに役立ったと思っっている。

そんなわけで、家から出る方は、自ら望むことが少なかったから、家に入る時に足を洗ったり拭いたりする習慣は、

「わあ、お迎えに来てくれた！ 嬉しいな嬉しいな。」

の、腰振りダンスに続く嗜み嗜み大歓迎会と共に定着した。

④勝手に二階から降りないこと。これも、二階へ上がってふたりと一緒に居たい願望が強かったし、お客さんが来て、自分もその席に加わりたい欲望よりも、ここに待っていてくれればふたりは必ず上がってくるとの確信の方が強かったらしく、一度だけ勝手に降りて追い返された後は、許可が出るまで決して降りては来なくなった。

⑤食卓に手を出さない。ノイがチビの間、わが家の食卓は丈の高い椅子とテーブルを使っていたから、必然的に食卓に手は掛からなかったのだが、仔犬の成長は驚くほど早い。何より醬油の焦げる匂いが大好きなノイは、何時ものように、

「あの上には何が載ってるんだろなあ？」

と、ひょいと身体を伸ばしてみた。と、どうだろう、届かないはずの手が届き過ぎ、食卓の端に置かれていたお新香の皿をひっくり返し、ばらばらと予期せぬ物が頭の上から降ってきた。おまけにふたりのどなり声。びっくりするのが大嫌いなノイは、それ以後、食卓がずっと低いものになるまで、机上の探訪をあきらめた。テーブルも椅子も低くなり、その椅子にノイも座ることを許された頃には、

「椅子の上は立ってる所じゃないでしょう。」

「そこに手を出しては駄目ですよ。」

などの言葉が理解できるようになっていたから、これもさほどの難問ではなかった。女房殿が

食卓に御馳走を並べ、所用でその場を外しても、そのまま留守にしても、なくなる物は何にもない。わが家で何か紛失した時、疑われるのはふたりの内の一人である。

⑥物を噛ったり持ち出さないこと。これには随分と気を使った。相手は名にし負うレトリバー（運び屋さん）である。噛られたり、持ち出されたりして破損するだけならまだしも、家の中にも庭にも、口にすれば危険な物も少なくない。気が付く限りは疎開させたが、扉のない本箱には、ノイにとっても面白そうな本が詰まっている。対策としては、咬む物、持つ物、破る物を、適宜与えることにした。見ていると新しく貰ったものがお気に入り様子なので、食べ切らないうちに次々とガムを与えてみたら、流石の食いしん坊にも、ガムは咬わえて歩く玩具になった。噛み破る破壊本能は、ホッチキスなど金具が使われていないボール箱を与えることで満足させることを計ったが、幸い、これも成功した。

「わー！ 凄いな。随分綺麗に散らかしたねえ。」

なんて変な誉め言葉に、ノイは得意そうな顔を見せ、転がっている本の被害は皆無であった。今では、ふたりの耳を噛むくらいのもだから、わが家の被害は敷居に付いた噛り跡位のものだ。

⑦散歩のとき水溜りに飛び込まないこと。ラブラドールは水が大好きだ。池であれ川であれ噴水であれ、例えそれが水溜りであったとしても、ノイは悉く興味を示す。考えてみれば、わ

れわれふたりも水遊びは大好きだし、雨の日の学校帰り、わざと水溜りでびちゃびちゃやって、長靴の中からズボンまで濡らし、叱られた記憶は鮮明だ。ノイの気持ちも分からないではないけれど、親の立場にたたされてみると、身体中泥だらけになられてはたまらない。かわいそうだが水のある場所は遠回り、ふたりから離れたくないノイは、仕方なしに付いて来る。庭にプールでもあれば良いのだが、宝くじはまだ当たらない。仕方がないからセメントこね用のプラスチック箱を買ってきて、水を満たす。ノイは、水が一杯になるのを待ち兼ねて中に飛び込み、前足で水を掻き出してご満悦である。温かい季節の足洗いを兼ねた、欲求解消法であった。

その内、季節が変わり、寒くなって濡らした足が冷たかったせいか、水溜りに飛び込まなかった時の誉め言葉が効を奏したせいか、びしょ濡れになっては具合が悪い理由がわかったらしく、自分から水溜りは避けて通るようになってくれた。

⑧ 拾い食いをしないこと。ノイは、食欲第一主義者のように見えるけど、決してそうではない。確かに、食欲が毛皮を着て歩いている面もあるに違いはないけれど、それは、ふたりが食べ物に関係している時だけの話で、外に出ると、ノイにとって食欲は二の次三の次になるようだ。ご多分に漏れず、幼い頃のノイは、散歩の途中で心惹かれる匂いのする物を見付けると、何かれとなく口に入れて見たがった。いわゆる拾い食いの気配である。これは放置できない。

強く叱って、口に入れたものは無理矢理取り出した。

「こんな汚ない物食べちゃうと、お腹痛くなっちゃうのよ。黴菌いっぱい付いてるんだから。拾った物お口に入れちゃいけないの。」

と、咬えた物を鼻先に突き付けられて、また、説明まじりのお説教が始まる。楽しかるべきお散歩の途中に、この時間が挿入されることに、敵もへきえきしたのだろう、次には何か興味引かれる物を見付けると、口に入れる前に、

「やっぱり駄目かなあ？」

という顔でこちらを振り向くようになり、「だめ、駄目！」と言う語気荒い言葉と、やめた時間の、

「わー！ 良い子。なんて良い子ちゃんなんでしょう！」

という感嘆の言葉と愛撫とで、間もなくノイのお鼻は、散歩の途中で食物の匂いを嗅ぐことを断念した。一つの行動に対する「叱り」と「賞賛」は、その場で明確に示すことが、教育効果を上げる有効な手段であるのは、昔からその対象を問わず良く知られている。今のノイは、野鳥のために誰かが撒くらしいパンの耳の絨毯の上に立っても、転がっているフライドチキンにつまづいても、知らん顔である。食欲の権化に戻るのには、自分がごく親しい人と決めている誰かが、食べ物を手にした時だけのようだ。しかし、それも食欲が総てに優先するのではなく、

ボール取りがやりたい時には、バスケットを見せても目もくれないし、ふたりの動きが気になる時は、いつも公園で出会うお友達の飼い主から、ビーフジャーキーなんて好物を差し出されても食べようとしないで、相手をがっかりさせている。

理解

「犬は人間の言葉を理解しない。人間が何か言っているその雰囲気を感じてそれに対応しているだけだ。」

という説があるが、ノイを始め、家の中で何時も人間と一緒に暮らしている犬たちを見ていると、どうもこの説は疑わしくなる。例えば、人々が楽しく談笑している時などに、話題がたまに彼らのことに移ることがある。こちらは別に彼らの方を見るでもなく、話の調子を変えるでもないのだが、悪口であれば抗議するし、賞賛であれば喜びの態度を示す。吠えたり鼻を鳴らしたりする彼らの表現は、ドリトル先生ならぬこちらには、残念ながら詳細に理解することはできないけれど、試みに、

「賛成なら、尻尾びんびんでお返事して頂戴。」

などと問い掛けてみれば、嫌なことだと尻尾は全然動かない。これは相手は何か言っているから尻尾を振って見せた、なんて単純なものではなさそうである。

本当のところは分からない以上、物事は否定的に捕らえるよりも、肯定的に捕らえたほうがよいはずだ。というわけで、ノイを知れば知るほど、言葉を掛けることが多くなった。知らない人が聞いたら、あんなにやってんだろうと思ひそうなことまで話している。

何事によらず、理由が分かれば、それに対処する行動を伴うわけで、その行動から推察するならば、こちらの話の相当の部分が理解されていることを、ノイの行動は示している。

「今日は獣医さんが来てお注射だからね。注射して貰わないとバルボなんてこわい病気になっちゃうんだからね。良い子でお注射して貰おうね。」

午後、獣医さんが来る時間近くなると、ノイは窓から外を覗いて人待ち顔になる。一度、肛門嚢が腫れて苦しかったのを、あっさり治癒して貰って以来、ノイは獣医さんに絶大な信頼を置いている。チビの頃は物陰に隠れて、呼ばれてもなるべく目を合わせないようにしていた癖に、今はベリーダグンスの歓迎会から始まって、

「そうそう。その鞆もってきたわねクンクン。よしよし。」と診療鞆を確認し、注射の準備が完了するのを待っている。

「注射器を持つと自分からやって来て首を出す犬なんて、いないなあ。」
と呆れられながら、ノイのお注射は終了する。ついでに口の中から目の具合、ひっくり返してお腹まで、身体中隈なく触って、健康診断をして貰う。時には、傷口にしみる薬なんかも付け

られるのだが、ノイはそれで治ると信じている風である。包帯や絆創膏なども勝手に取ってしまったりしないから、傷の手当ては楽である。

獣医さんをお願いすると、麻酔で眠らせてしかできないという歯石取りも、わが家では歯医者さんからそれ用のスクレーパーを買ってきて、自分でやっている。ごりごりやられるのは、ふたりも余り好きではないが、こいつは虫歯の源にもなる。鋭い刃先が歯茎を傷付けないように、張り詰めた緊張感がノイにも伝わるのか、「やだなあ。」という顔はしているけれど、終わるまで逃げ出すことはない。お陰で、ノイの歯は年齢の割に綺麗である。歯槽膿漏の恐れは当分ないだろう。

シーズンの時に履かせるパンツなども、最初は嫌がるかと思ったのだけれど、これは全く逆だった。着けていなくて汚した跡を、女房殿が丹念に掃除しているのを見ているせいかな、その汚れをえらく気にするところを見ると、着けていれば辺りを汚さないから好きなのだろうか。何種類かのパンツがある中で、ノイは、アメリカで買ってきた物が一番格好良いと思っている節があるところを見ると、敵はファッション感覚ありとするべきか。

ノイと訓練

「お手」「お廻り」「ちんちん」「ジャンプ」「梯子登り」「棒渡り」「バック」「ほふ

く」「後脚で立つ」「頭にコップを載せて水こぼさないように歩く」などと、訓練競技会の項目を見ると、いろんなものが並んでいる。

中には犬の骨格構造からして、身体に無理のかかりそうなものも少なくない。わが家では、そんなことできなくてもいいやと思っていたから、二年間くらいは、特別なことは何にも教えなかった。「お手」はこちらが前に座ると、「暇なんなら、何かして遊ぼうよ。ねえ。」と、向こうから黙ってくれたし、「持って来い」は、大好きなボール投げを続けたさにすぐ覚えた。一般の訓練科目にはないようだけれど、ノイは「持って行って、元に戻す」ことも簡単に修得した。ベットの端で歯を磨いて貰う時、「持っていらっしゃい」で持って来たタオルを顎の下に敷く、何のためにタオルを持って来たのかを知っているノイは、歯磨きが終了してたんだタオルを、「タオル、元の所に置いてらっしゃい」という言葉で、元の所へ置いてくる。人の所へ持って行くのは容易でも、誰もいない元の所へ戻すのは難しいと思うのだが、どうだろうか。「バック」は、狭い台所でUターンするよりも、その儘戻ったほうが楽だから自然に修得した。「おいで」や「紐無し行進」は、ただでさえも人間べったりのひっ付きっ子だったから、呼ばれればいそいそとやって来て横を歩いた。散歩に出ると、ほとんどふたりから離れないで、岐れ道にくるたびに、

「今日はどっち行くの？」

と振り仰ぐから、「右、左、真っすぐ」などの言葉も自然に覚えた。

ノイが一体いくつくらいの語彙を持っているのか、「ノイノイ辞書」を作ろうと、カードを取り始めたこともあったが、ノイが覚えるのに追い付かなくなって、いまだにこの試みは中断したままである。

リードは、ノイにとっては自分を拘束するものではなく、飼い主と心を繋ぐためのものであった、のは良かったのだが、彼女の心のはやる時には裏目に出る。

「わあ！ 待ちに待ってたお散歩だ。嬉しいな嬉しいな。」となると、リードを通してそれを持つ人に伝える。嬉しければ嬉しいほど、伝え方は激しくなる。つまり、我武者羅にリードを強く引っ張るのである。帰りは満足してゆっくり歩いてくれるからよいのだが、公園に着くまでは大変だ。敵は立派な体格で安定の良い四脚だが、当方は不安定な二本足。引っ張りっこは当方の負け。体重のほぼ変わらない女房殿などは、引っ張られると意地でもリードを離さないから、落馬した騎手よろしく引きずられて肘を擦りむく。そんな頃、小生の仕事の都合で、当分の間ノイと二人だけで暮らさなければならぬ事態が生じて、さすがの女房殿も音を上げた。彼女の方も仕事があるので、とてもそんな調子のノイすけの散歩に毎日付き合ってはられない。せめて一日置きにでも、散歩をさせてくれる人というわけで、通って来てくれる訓練士さんをお願いすることにした。話に聞いたところでは、訓練士さんもさまざまで、「訓練

します」と連れ出しても、公園などで一服して帰ってくるだけだとか、一所懸命でも下手な人に訓練を任せると、犬の性格が変わってしまうこともあるということだったから、

「何にも教えないでください。散歩だけさせてくだされば結構ですから。」
なんて、変な頼み方をしたけれど、

「散歩の出がけに引張るのは、嬉しくて仕様がなからですよ。嬉しい気持ちの表れを叱って止めさせるのもかわいそうじゃありませんか。」

と言う訓練士さんの人柄に、ふたりは安心した。ノイの方は、

「この人、誰？ わたしあんまり好きじゃない。」

という顔で、散歩に行くのに引張るのも忘れ、見送る女房殿を振り返り振り返り、角を曲がって消えて行った。慣れるのには時間がかかったようである。

真面目なプロの立場からすれば、通って来て、訓練しないで散歩だけというのは、張り合いもないらしい。やがて、

「何か教えてもいいでしょうか？」

ということになり、性格が変わったり、身体に無理がからないことならという条件付で、ノイのお勉強が始まった。二か月もすると、

「競技会に出してもいいでしょうか？」

「えーっ。ノイに何かできるんですか？」

女房殿は、以前とちっとも変わりないノイを見つめて不審顔。

「できますとも。次はどうぞ見に来てください。」

一体、ノイはどんな様子でお勉強をしてるんだろう。女房殿は授業参観に出掛けて行く。競技会では十課目の試験を受けるはずである。ノイは次々にそれをこなし、参観授業で父母が気になる児童の瞳でこちらを見る。

「わあ！ ノイできるんだあ。うまいのねえ！」

休み時間に、沢山「良い子良い子」をして貰ったノイの顔は、得意げである。家族が喜ぶ様子を見て、ノイの動作には自信が満ち溢れてきたようだ。それからは、訓練士さんが来ると、元気に出掛けて行くようになった。家で「これ誰の所へ持って行って」とか、「呼んできて」とか、用事を頼まれた時の喜色満面の姿と変わらない。この調子なら性格が歪む恐れはないだろう。訓練で覚えたことが、家庭生活でどれほど役に立ったかは、定かでないが、結局、ノイは成り行きで出場することになったの競技会で、トレーニング・チャンピオンになっていた。訓練士さんの話によると、家の中で暮らしている子は信頼関係を結ぶのに時間はかかるけど、仲間良くなってしまうえば言葉を理解する能力が優れているので、覚えはずっと早いそうだ。

トレーニング・チャンピオンになってからも、もう少し続けたらということだ、ノイは嗅覚

の訓練でGD（ガードドッグ）なんて資格も貰ったが、これは枯れ葉の中に飛ばされて、紛れてしまった茶色の手袋を、女房殿が探しあげね、半ベソをかいている時に、難なく見付け出してきたりするのに役立っている。

しかし、嬉しくて引っ張る方は、昔ほどではないにしても、こちらが「待って」と言わない限り、残念ながら相変わらずである。嬉しがりNOI（ナンバーワン）のノイであれば、これは仕方がないのかも知れない。

競技会や展覧会に出るようになって、よかったことの一つは、社交性が育まれたことである。一人っ子で近所に同じ年頃のラブラドルの友達が居なかったノイは、余所の子と接触する機会が少なかった。小さい頃連れて行った姉の家で、大人だったビーグルに軽くあしらわれて以来、自信を消失したのか、たまたに公園で他の子に出会っても、転げ回って遊ぼうとはしなかった。他の犬とどう接したらよいのかわからず、おずおずした様子があったが、競技会や展覧会の会場では、出番が回ってくるまで、周りにいろんな種類の犬がいる所で待つて居なければならぬ。待つて居る間に、お互い何らかのコミュニケーションを取り合っているのかどうかは知らないが、他の子がうまくできて喜んだり、失敗してしょんぼりしたりしているのを見ていることも多いから、場慣れしたことは間違いない。今では周りにどんな仲間がどれほど居ようと、身構える風もなく、間をすいすい通り抜け、トラブルを起こすこともない。犬同

士を見ていると、種類や大きさには係わりなく、どちらかが緊張して身構えると、敏感に相手も反応するようだ。お陰で、チャンバラ映画のような殺気が走る緊張感を持った擦れ違いは、ここのところあまり経験したことがない。

ノイの倫理観

ラブラドルは習慣性の強い犬種であるようだ。ノイも、平和な毎日を繰り返す生活が好きらしい。食べる物、いつものドッグフード。お散歩、いつもの時間、いつものコース、いつもの所でボール投げ。自転車でリードを着けている時は左側、外したら右側。お昼寝、いつもの時間、いつもの所。お茶の時間、なんかお菓子が付いてるはず。一杯飲み始める時間、チーズかジャーキーのおつまみが出てくるはず。歯を磨いて貰うのも決まった側から。・・・かくかくしかじか。

毎日の手順を呑み込んでいるから、こちらがそれを乱そうとすると「違うでしょ!」といった顔をする。朝起きる、ノイをトイレに連れて降りる。一回目のトイレを水で流す。流すのをうっかり忘れていると、二回目をしないでこちらの顔を見上げる。もちろん、する場所も寸分たがわず同じ場所である。足とお尻を拭いて貰う順番も決めてあるらしく、決まって右の前足から、それを、後足から拭き始めたりすると、怪訝な顔をする。玄関を通りかかると立ち止ま

り、こちらが新聞を取ってくるのを待って居る。新聞を持ってくるまで動こうとしないから、この頃多い新聞休刊日には困りものである。これらの生活習慣から外れるのは、ノイの倫理観からすれば、いけないことであるらしい。これは、時に遊びに来た余所の子にも適用される。ある日、ノイより年上の女の子が遊びに来た。長幼の序を守って、ノイはその日まで彼女に目置いていたのだけれど、慣れないお家でトイレに困ったその子が、絨毯の上で漏らしてしまつたのを見た途端に、形勢は一転した。ノイは「貴女駄目ねえ！」とでも言いたげな顔をすするし、漏らしてしまつた子の方も「すみません。御免なさい。」と恐縮の態度をそれから示すようになったところを見ると、その子にもトイレに関して同じ倫理観があつたのだろう。

ノイはまた、子供の頃から善悪の判定基準を自分自身で持っていた。まだわれわれのベツトに自由を上げないことにしていた頃、ノイの希望は、ベツトの上で一緒にくつろぎの時を過ごすことであつた。ノイの様子を見ると、その希求があらわだつたから、上半身を載せる位は暗黙の了承にしていた。その内に、ベツトの端に載つた上半身は次第にお尻を連れてくる。しかし、彼女の倫理観は、許可されない以上ベツトの上に全身で登ってしまうことを許さない。片足だけベツトからぶらさげ、満足そうに目をくりくりさせている不安定な姿を何度か見せられて、遂に、ノイのベツト上陸は解禁になつた。降りてはいけない階段の場合も、後足だけ二階のフロアに残っていれば、倫理観念に低触しないから善であるらしく、頭と前足は二く

三段下へ延び、ずり落ちそうな格好で、上がって来るふたりを待っていることがしょっちゅうである。持ち出す物も、屑籠の中の物はいけけないのだが、自分が、一旦、貰ってびりびり破いて遊んでいた紙屑は、それが誰かの手によって屑籠の中に移動した後でも、これは自分が貰った物だから、持ち出しても良い物と決めているらしい。貰わなかったボール箱と一緒に屑籠に入っているも、貰った箱の屑しか持ち出さない。変なところが律儀なノイの倫理観だが、どこか人間社会にも通じる点があって、哄笑、苦笑の連続である。

笑ってばかりいられないのは、ノイとのドライブである。私が運転しない限りはよいのだが、家の車でお出掛けとなるやいなや、ノイの倫理は活躍を始める。

「助手席は急ブレーキが危ないから、乗ってはいけけない。」

「待つように言われた時は、知らない人が窓からちよっかいを出しても取り合わない。」

「早く帰ってこーい、なんて吠えない。」

「シートを噛み破ったり、置いてきぼりは悔しいけど、シートベルトを噛み切ったりしない。」

「車の装置に触らない。」

と、ここら辺までは大歓迎なのだが、

「わあーい！ 車でお出掛けだワンワンワン。」

自動車大好き、ドライブ大好き、尻尾が笑いで止まらないのはノイばかり。同乗のふたりは、もう疲れてしまうのである。ノイもそろそろいい年になったのに、こればかりは治らない。訓練士さんに言わせれば、

「ノイちゃん、一緒のドライブが嬉しいんですよ。嬉しがらせてやれば……。」

ということになる。因みに、訓練士さんの車ではクンも言わずみじろぎもしないそうである。

世の中、欠点がない奴なんて、面白くも何ともないわけだから、これも、ノイのノイたるゆえんと悟るべきか。何事にも根気良く、真剣に取り組むという点において、ノイほどの奴にお目に掛かったことはないのだから……。